

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：36101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590181

研究課題名(和文) インターネット調査による成人男性の性的欲求に関する心理学的研究

研究課題名(英文) Psychological study on sexual desire of adult male by internet survey.

## 研究代表者

下坂 剛 (SHIMOSAKA, Tsuyoshi)

四国大学・生活科学部・講師

研究者番号：30390347

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は成人男性の性的欲求について心理尺度を作成し、その要因について調査研究することである。成人男性11名に対する半構造化面接から性的欲求に関する質的内容のモデルが作成され、これをもとに247名の成人男性によるインターネット調査から、性的欲求の認知的側面に関する尺度が作成された。性的欲求の認知は、自尊感情や性罪悪感等との関連性が確認できた。今後はさらなるデータの蓄積と、性教育などの実践活動への応用が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to construct sexual desire scale for adult male and to investigate its factors. 11 adult men were investigated by semi-structured interview and qualitative analysis was performed. And the sexual desire scale were constructed by 247 adult men based on internet survey. The relation between sexual desire and self-esteem, sexual guilt were confirmed. Further studies are needed in order to apply the findings to sex education.

研究分野：教育心理学

キーワード：性的欲求 インターネット調査 成人男性

## 1. 研究開始当初の背景

欧米の“sexual desire (性的欲求)”に関する心理学的研究では、大学生男女を対象とした性的欲求を測定する尺度などがいくつか開発された後は、性的欲求の要因や予測因に関するデータが蓄積されている。いくつかの研究では、大学生や中年期に及ぶ成人男女に対する Web を活用した調査も含む、多様な手法を用いたデータ収集がなされ、人口統計学的変数をはじめとする関連変数との相関的分析がなされている。

日本では、大学生男女の性的態度と性行動・性意識が、依存対象とどのように関連するかの研究や、大学生男女に「性的寛容さ」をはじめとする因子で構成される性に対する尺度を構成し、人口統計学的変数との関連を検討した研究、中学生・高校生に性行動に関する調査などが散見される。そのうち、犯罪抑止の観点から成人男子に対して性的欲求尺度を作成した研究もみられる。

男性には思春期の第二性徴以後、性的欲求への個々の対処が非常に重要な問題であることは認識されているながらも、日本の青年期を対象とする心理学的研究においては、男性の性的欲求そのものを扱う研究が非常に少ない現状がある。

一方で、日本でも社会心理学や青年心理学領域を中心に、恋愛行動に関する研究が蓄積されているが、性に関する問題はデータの蓄積が少ない現状がある。調査を実施する際の困難さが、その一因であると考えられる。

このように本研究開始当初の状況としては、性的欲求を心理学的変数として扱う研究が数少ない状況にあった。一方で主に男性による性犯罪が起こる度に、その心理的背景が問題とされるものの、十分なデータのないまま解釈がなされている現状もあった。

## 2. 研究の目的

本研究は日本と欧米における先行研究をふまえた上で、男性の性的欲求について心理学的に調査研究を行うことを目的としている。主な目的は以下の3点である。

- (1) 一般的な成人男性の性的欲求を測定する尺度を作成し、因子の内容を明らかにする。
- (2) 性的欲求を規定する心理的要因や、性生活の状況との関連性を検討する。
- (3) 得られた知見をもとに、成人男性に関する性の悩みに対する教育的支援の在り方や、教育的実践に生かす方策等、社会に発信する提言につなげる。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では予備調査段階における質的研究として、成人男性がもつ性的欲求について、面接によるインタビューを通じてその内容を収集した。被面接者は有職者の成人男性11名であった。調査対象者は縁故法によって募集し、20代から40代で結婚歴の要因も考慮した上で対象者を選別した。調査対象者に

は全て面接承諾書へのサインを求め、合意のもとに調査が行われた。面接の時期は、2013年7月から10月にかけてである。面接は、性行動や性的欲求の認識、性道徳観、性行動にまつわる葛藤の4つの主な内容について、それぞれいくつかの質問を行い、状況によって被面接者の語りを妨げないようにした。また、質問内容への抵抗感から面接途中に中断を申し出た被面接者はいなかった。

(2) 面接データから作成された男性用性的欲求認知に関する項目について、第1回目のインターネットを用いた質問紙調査を実施した。

調査対象者は、成人男性300名、平均年齢35.7歳(標準偏差8.01)、20~49歳の範囲。有職者は80%、年代(20代・30代・40代)×結婚歴(有無)の2要因を統制するため6つのセルに50名ずつとなる割付が行われた。調査時期は、2014年2月。

調査手続きは、インターネット調査を専門とする業者に委託し、匿名での Web 上における質問紙調査を実施した。

調査内容は、男性用性的欲求認知項目、自尊感情尺度、異性不安尺度、年齢や職業などフェイスシート項目。

(3) 第1回のインターネット調査を受けて、さらにデータを蓄積するため、日本人男性の性的欲求と性的罪悪感、文化的自己観の関連性についてモデルを構築して検討することを目的として、第2回インターネット調査を実施した。

調査対象は、日本人の成人男性390名。平均年齢は35.5歳(SD=7.90)で20歳から49歳までの範囲。

調査時期は2014年5月。調査内容は、男性用性的欲求認知尺度、性的罪悪感尺度、相互独立 相互協調的自己観尺度、虚偽スケール等。

## 4. 研究成果

(1) 面接調査の結果について、ICレコーダーに記録された内容を逐語録にした。次に11名によって語られた内容を全て合わせ、実際の分析を行うにあたって、質的データの分析手法の1つである修正版グラウンデッドセオリアプローチの方法にしたがって分析ワークシートを作成した。具体的には記述データから11の概念を設定し、それぞれについて被面接者の語りである具体的なヴァリエーションを抜き出して整理してまとめた。そして4段階程度の過程を経て、理論モデル(図1)を構成した。作成したモデルによると、男性の性的欲求体験は、全体として性的欲求の葛藤などの認識を発して「適応重視」と「強い悩み」という2つのコア・カテゴリーによって説明される。「適応重視」では拘束感や愛情を表す「他者への気兼ね」を経て、パートナーとのセックスや自慰による欲求充足につながる。また「強い悩み」では性的欲求の様々な様相から、浮気などリスクのあ

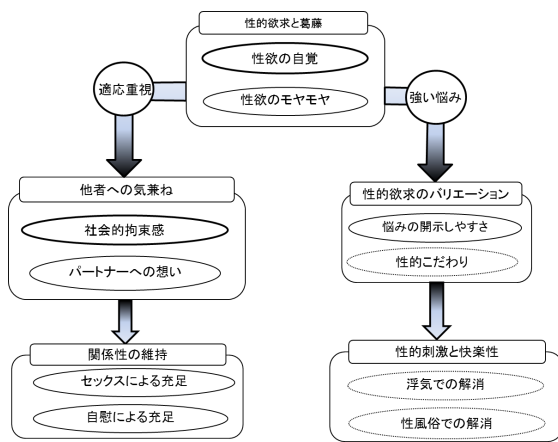


図1 男性の性的欲求体験のモデル

る行動につながる。換言すれば、男性の性的欲求に関する体験は、パートナーとの関係の中で相互の状況を踏まえながら充足する性的欲求と、悩みも伴うプライベートで他者に開示しにくい性的欲求の様相が想定されるといえる。

(2) 第1回目のインターネット調査についての分析結果は次の通りである。

対象者の選別をするため、分析に先立って恋愛経験やセックス経験を検討したところ、これまでに経験がないとした対象者や恋愛経験がないとした対象者が合わせて53名いた。今回の項目の多くはパートナーとのセックス経験が前提となっているため、以後の因子分析はこれら53名を除外した247名で行った。

性的欲求認知に関する51項目について、項目分析を行ったところ、「社会的制裁への恐怖感」に関する5項目は天井効果がみられ、「性的こだわり」の1項目にフロア効果がみられたので、以後の分析から除外した。残りの45項目について因子分析(主因子法・promax回転)を行ったところ、固有値の推移と因子の解釈可能性から4因子解が妥当であると判断した。因子負荷量が.40以上で複数の因子に負荷しないという基準で19項目が残り、再度因子分析を行った。回転後の4因子による説明率は44.22%であった。第1因子は「深い満足感」、第2因子は「自己処理」、第3因子は「性的開示」、第4因子は「浮気衝動」と命名した。因子間相関は、無相関から弱い正の相関であった。相関の程度は弱いですが、全体として相互に正の関連性をもっていると考えられる。

信頼性について、内的整合性の観点から係数を算出したところ、「深い満足感」.807、「自己処理」.713、「性的開示」.717、「浮気衝動」.741、19項目全体で.753であり、いずれも十分な値を示した。以上、4下位尺度19項目をもって男性用性的欲求認知尺度(Sexual Desire Cognition Inventory for Male: SDCI-M)と命名した。

加齢による変化を検討するため、SDCI-Mの19項目合計得点を用いて、20代~40代の群

間で一要因分散分析を行ったが、有意な差はなかったが、加齢によって低下する傾向がみられる。

構成概念妥当性を検討するため、SDCI-Mの各下位尺度得点と自尊感情、異性不安、順法的態度の合計得点の相関を検討した(表1)。「深い満足」は自尊感情と、「自己処理」は異性不安とそれぞれ有意な正の相関を示した。順法的態度の間では「深い満足」「自己処理」が有意な正の相関、「性的開示」は有意な負の相関を示した。これらの結果からSDCI-Mにおける構成概念妥当性の一端が示されたと考えられる。

表1 SDCI-Mと各尺度間の相関

	異性不安	自尊感情
深い満足	-.064	.255 ***
自己処理	.250 ***	-.116
性的開示	-.025	-.101
浮気衝動	.059	-.092

\*\*\* p<.001

SDCI-Mの年齢要因を検討するため、調査対象者を世代によって3群に分け、各下位尺度得点の一要因分散分析を行った結果、自己処理は30代・40代より20代が高く「性的開示」は40代より20代・30代が高かった。

関連要因の検討として、現在の就業状況を3つに分類し、正社員(N=190)、契約・派遣・パート・アルバイト(N=25)、離職中・無職(N=12)の3群間でSDCI-Mの各下位尺度得点の一要因分散分析を行ったところ、「自己処理」のみで有意差がみられ、契約社員等の群が無職等の群よりも高かった。結婚歴がある対象者において、「子の有無」2群(有=108, 無=39)によってSDCI-Mの各下位尺度得点のt検定を行ったところ、「深い満足」で有意差がみられ、子どもがいる群で高かった。「性風俗サービスの利用経験の有無」(有=141, 無=106)によってSDCI-Mの各下位尺度得点のt検定を行ったところ、「性的開示」「浮気衝動」でいずれも利用経験があるとした群が有意に高かった。

以上の結果から、自尊感情、異性不安との相関、および就業状況、子の有無、性風俗サービスの利用状況との関連性の検討結果から、SDCI-Mの一定の妥当性が示されたと考えられる。

(2) 第2回インターネット調査についての分析結果は次の通りである。

性的罪悪感尺度の分析について、因子分析では、虚偽尺度でいずれかに「1」と回答した30名のデータを除外した360名のデータに逆転項目の処理をした。10項目で1因子構造と仮定して確認的因子分析を行ったところ、2値は有意であり、適合度は十分な値でなかった。そこで係数が.30以下と低かった4項目を削除し、6項目で1因子構造を仮定して確認的因子分析を行ったところ、2値は有意だったが、十分な適合度指標を示し

た (GFI=.965, AGFI=.919, RMSEA=.097)。6項目の係数は.84であり十分な値であった。性的欲求認知との関連の分析では、上記の360名のうち85名(23.6%)は特定のパートナーとのセックス経験がないと回答した。性的欲求認知尺度はセックス経験があることを前提とした尺度のため、「経験有」とした275名を対象に、性罪悪感(6項目合計)と性的欲求認知尺度3下位尺度との相関を検討した。その結果、性罪悪感(6項目合計)は、「深い満足感」と有意な負の相関を示した。本研究は男性のみのデータであることや、英語からの訳出が結果に影響した可能性はある。本尺度の10項目での1因子構造の適切性を判断するには、訳出も含めてさらなるデータの蓄積が必要である。

次に、SDCI-Mと、性的罪悪感、文化的自己観の3つの尺度によってモデルを構築し、構造方程式モデリングによって検討した。モデルの分析に先立ち、直接効果を検討するため、独立変数を「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」「性的開示」とし、独立変数をそれぞれ「深い満足」と「性風俗利用」とする重回帰分析(強制投入法)を行ったところ、「深い満足」に対してのみ「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」において有意な標準偏回帰係数がみられた。その上で共分散構造分析の結果、カイ2乗検定は有意差がなかった。適合度指標は、GFI=.997, AGFI=.964, RMSEA=.031と、いずれもモデルとデータが適合していることを示す結果であった。モデルの間接効果をSobel Testで検定したところ、「相互独立 性的罪悪感 深い満足感」、「相互協調 性的罪悪感 深い満足感」、「相互独立 性的罪悪感 風俗利用」、「相互協調 性的罪悪感 風俗利用」、「相互協調 浮気衝動 風俗利用」、「性的開示 浮気衝動 風俗利用」の6つの間接効果が有意であった。一方で、「相互独立 深い満足感」の直接効果はみられず、「相互独立的自己観」から「深い満足感」に至るパスにおける「性的罪悪感」の媒介効果が明らかとなった。

### (3)まとめ

以上の結果、質的な面からいえば、成人男性は自分の性的欲求に対してさまざまな葛藤や思いを抱えて社会生活を営んでおり、どのような性行動を取るかは、パートナーとの関係性もまた、重要な要因となっているといえる。量的な面からいえば、男性は性的欲求をさまざまな多元的に認知しており、単純な構造とはいえないことが示唆された。性的欲求には年齢による衰えや変化の影響や、性犯罪への懸念など社会的な要因も少なからず影響する。文化的な要因の分析については、日本人の対象者のみとなったため、今後は欧米の対象者への調査等も必要となってこよう。性の問題を心理学の質と量の双方の研究手法からとらえる試みはまだ端緒にすぎたばかりである。しかしながら、恋愛研究や夫婦関係の研究など、男女の関係性を扱う場合

に、性的欲求という要因も考慮していくことが増えてくれば、よりリアリティのある現象の把握と説明が可能になると考える。今後も多方面の研究者によるデータの蓄積を望みたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

下坂 剛 (2015). 短縮版 Mosher 性罪悪感尺度日本語版の検討 成人男性データを用いて . 日本発達心理学会第26回大会 2015年3月20日発表 東京大学(東京都文京区).

Tsuyoshi, SHIMOSAKA. (2015). A Causal Model of Sexual Desire, Sexual Guilt, and Cultural Self-construal . The Society for Personality and Social Psychology 16th Annual Meeting. 2015年2月27日発表 Long Beach convention center (LA, USA).

下坂 剛 (2014). 成人男性の性的欲求に関する研究(3) 男性用性的欲求認知尺度の妥当性・関連要因の検討 . 日本教育心理学会第56回大会 2014年11月7日発表 神戸国際会議場(兵庫県神戸市).

下坂 剛 (2014). 成人男性の性的欲求に関する研究(2) 男性用性的欲求認知尺度の因子分析と信頼性の検討 . 日本心理学会第78回大会 2014年9月10日発表 同志社大学(京都府京都市).

下坂 剛 (2014). 成人男性の性的欲求に関する研究(1) M-GTAによる質的分析 . 日本カウンセリング学会第47回大会 2014年8月31日発表 名古屋大学(愛知県名古屋市).

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

下坂 剛 (SHIMOSAKA Tsuyoshi)

四国大学・生活科学部・講師

研究者番号: 30390347